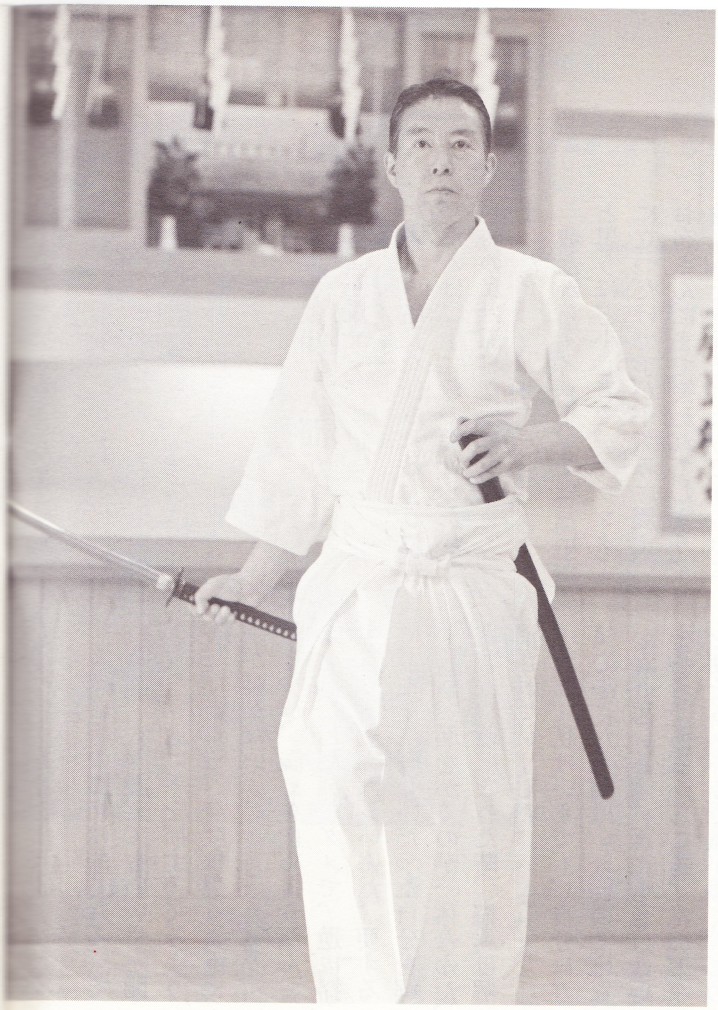
インタビュー①

# 我、明治大帝の御心を奉体しさらに進まん

明治神宮武道場
至誠館三代目館長

## 荒谷 卓



**広大な明治神宮の境内に佇む武道場・至誠館。武道を通じ、国家に献ずる人材を育成することを目的に創設されたこの道場の三代目館長を務めるのが、荒谷卓氏である。「歩歩是道場、即ち常在戦場」と語る氏に、これまでの歩みとともに武士道の根底にある精神についてお話しいただいた。**

あらや・たかし――昭和34年秋田県生まれ。東京理科大学を卒業後、57年陸上自衛隊に入隊。福岡19普通科連隊、調査学校、第一空挺団、弘前39普連勤務後、ドイツ連邦軍指揮大学留学。帰国後、陸上幕僚幹部防衛部、防衛庁防衛政策局戦略研究室勤務を経て、米国特殊作戦学校に留学、帰国後、編成準備隊長を経て特殊作戦群初代群長となる。研究本部研究室長を最後に平成20年退官。一等陸佐。21年、明治神宮武道場「至誠館」館長に就任し、現在に至る。鹿島の太刀、合気道6段。著書に『戦う者たちへ』(並木書房)がある。

### やっと天皇陛下の統帥下に入れた

――明治神宮内の武道場・至誠館の三代目館長になられて三年が経ちましたね。

**荒谷** そうですね、今年で四年目になります。その前一年間は、専任師範として稲葉稔前館長の下で勤務しましたので、自衛隊からこちらに参りまして五年目に入りました。

――自衛隊では日本で初めて特殊作戦群を創設され、初代群長というお立場でしたが、どのような経緯で館長に就任されたのですか。

**荒谷** もともと学生時代から明治神宮至誠館に通い出し、武学師範の島田和繁先生から「おまえは、「国安かれ、民安かれ」とお祭りされている天皇陛下の統帥の下、国家に忠義を尽くしたいと願っていた葦津珍彦先生でした。

至誠館は、そういう人材を育成することが第一義です。

武士道というと武家が生まれてからできたものだと考えられがちですが、日本の武の精神基盤はも

特集 歩歩是道場

**荒谷**　もともと学生時代から明治神宮至誠館に通い出し、武学師範の島田和繁先生から「おまえは、軍人の顔をしているから、自衛隊に行け」と言われて入隊したものですから、自分では、至誠館で学んだ精神を自衛官として現実の国防の場で実践し、本物の武道を修養する。そういう思いでやってきました。

特殊部隊も、つまるところ自衛隊の中に正しい日本精神を持った集団をつくりたいと。それが自分が自衛隊に入った使命であり、何があっても完遂しよう。その思いが遂げられましたので、依願退職しました。

――それでお若くして辞められた。

**荒谷**　四十九歳ですから若いとはいえませんが、武道精神の実践の場を広げるよい機会と思い退官しました。稲葉先生には折に触れてご相談に伺っていましたので、退官の決心を伝えに参りましたら「そうであれば……」と後任のお話を頂戴したのです。

――原点回帰ということですね。

**荒谷**　明治神宮に奉職が決まり、最初に正式参拝した時の感激は一入でした。私は自衛隊にいた時も、「国安かれ、民安かれ」とお祭りされている天皇陛下の統帥の下、国家に忠義を尽くしたいと願っていました。

――現行法では自衛隊の最高指揮官は総理大臣ですからね。

**荒谷**　はい。至誠館の館長になることで、武人として、明治天皇の大御心の統帥下に入ったのだという深い感動を覚えました。

## 武士道の原点は神武の精神

――至誠館は今年創設四十周年の節目の年とお聞きしました。

**荒谷**　はい。この武道場は御祭神明治天皇の大御心を奉体して、武道を通じ心身の練磨をすることで健全なる国民精神を養うこと。そして、国家社会のために貢献できる人材を輩出することを目的に創設されました。

四十年前というのはちょうど日米安保の混乱の頃で、社会が非常に緊迫していました。そういう国家の大事にあって、国を正しい方向に導いていける人物が極めて重要であると。ならば明治神宮の境内に武道場を、と提案されたのが戦後の神道界に大きな影響を与えた葦津珍彦先生でした。

至誠館は、そういう人材を育成することが第一義です。

――聞くところでは、海外にも武道を広めに行かれていると。

**荒谷**　初代館長の田中茂穂先生が、海外に演武に行かれて現地の方々に大変関心を持っていただいたことがきっかけです。

それを二代館長稲葉先生が発展させ、至誠館武道を学びたいという人が増え、欧米諸国の有志が自分たちで「インターナショナル至誠館アソシエーション」という組織を創りました。彼らは、明治神宮至誠館の武道精神を学ぶことで、自分たちの民族精神文化の原型を取り戻したいといって活動されているのです。

ご存じのとおり、ヨーロッパなどではキリスト教の普及と近代化によって、それぞれの民族的精神文化や信仰は壊滅的に破壊されましたから。

――日本の武道には普遍的に民族的な誇りを奮い立たせる何かがあるのでしょうか。

**荒谷**　それは、日本武道の精神基盤に神道の精神があるからだと思います。

武士道というと武家が生まれてからできたものだと考えられがちですが、日本の武の精神基盤はもっと古いのです。

初代天皇の御諡を「神武」とお呼びすることからも分かるように、昔から日本では「神」と「武」は一体であったと思います。同時に、私たちの祖先はそれだけ深い意味を込めて初代天皇の御諡をつけたわけです。

神武天皇は建国の詔で「八紘を掩いて宇と為さん」、要するに、天のした世界が一つの家族となるような社会をつくり為そうと呼びかけて橿原に都をひらきました。

一方では神武東征という戦によって、互いに奪い合いをしている状態を平定し、稲作という文化を与え、在るものを奪い合う文化ではなく、共に協力して稲穂を育て持続的に成長する文化を広め、まさに家族のような社会をつくろうとしたのだと思います。

戦いの目的は、「存在し奪い合う」だけの文化を「共に生み成す」文化へと正すこと。だから、日本の武道は、戦う前に礼を尽くして無用の争いを避け、やむを得ず戦っても、また礼を尽くして共に生き

「"我一人いれば、ことは成る"という強い自負心が大切だと感じました」

る道を探る。そうした徳性を予定して心身を鍛練するのです。

このような、日本武道の精神哲学が海外の人々の心に響くのではないでしょうか。

しかし、いまの日本を見ますと、当の日本人が神武の精神を自覚できず、日本までが奪い合いの文化に変質してしまうのではないかとたいへん危惧します。

だから、大きな意味での文化防衛のため、日本武道の精神を復活し広めることが至誠館の重要な使命だと思っています。

## 我は神国の民 唯一人陛下の臣の気概

――武道の道に進まれた原点をお教えください。

**荒谷** 小さい頃から相撲とか柔道が大好きでした。なにより正義の味方になるのが夢で、風呂敷を巻いて屋根から飛んだりと。

そこから、人との出会いや教えによって、日本神話の「修理固成」のように、自分に内在していた漂える精神が勇気とか正義感といった形へと次第に作り固め成された気がします。

そして、それを決定づけたのがこの至誠館です。初めて訪れた時の衝撃はいまでも忘れません。

――どのような衝撃を？

**荒谷** いまの時代にもこんな人が実存するのか、という。私が求める武の精神を体顕している人を初めて見たような衝撃です。

至誠館で人を知り、その人を師として学び、さらに自らの体験を通じ発展させていったということです。ですから、私の武道は「精神は至誠館で養い、兵法は現実の社会で学び実践する」という形で進展してきましたので、私にとって武道は現実の社会での人生そのものです。

至誠館に通い出して十二年、自衛隊に入隊してから十年の月日がたった平成四年、習志野の空挺団に勤務していた折、冷戦後の国内外情勢の大転換の中で自分の思想と行動に焦りを感じ、どうしても至誠館の生みの親である葦津先生と直接話をしなくては、と思いつめ、一人で鎌倉のご自宅に伺いました。

――先生からはどのような教えをいただきましたか。

**荒谷** まずは、心を鎮めろと。その上で、自分が「神国の民」であり、「天皇陛下の臣」である自覚を持てと、いうことでした。

――神国の民、陛下の臣ですか。

**荒谷** 日本の神話では、森羅万象全てが神々の子孫です。であれば、自分は神々の子であると自覚すればいい。神々の子としての使命を果たすため、神を敬い祖先を崇め、心を同じくして生き抜く。みんながそういう心境になれば、この世を神の世に近づけることができる。というのが「神国の民」としての自覚だと思います。

また、明治維新という政治の大改革は、「天皇の臣」としての自覚が志士に透徹したからこそ成しえたわけですが、その範は水戸学によって普及された大楠公・楠木正成の生き様です。大楠公は、後醍醐天皇の「天下の情勢と幕府に勝つ術ありや」との御下問に対し、「正成一人なお生きていると聞こえ召せば、聖運ついに開かれるべしと思し召せ」と奏上しました。「聖運、我一身にあり」との絶大なる自信と覚悟こそが大楠公の精神の核心であり、建武の中興を実現する力の源だったと思います。

なぜ大楠公が、あるいは維新の志士たちが、あれだけの大事業をなし得たかと言えば、みな自分が、「神国の民」であり、「天皇陛下の臣」だと。そして「我一人いれば、ことは成る」という強い自負心があったのだと思います。

我は、神国の民、陛下の臣――。その気概を自らの中で強くして、葦津先生のご自宅を後にしました。

## 武士道精神が根付いた部隊をつくろう

――その思いを自衛隊の中で発揮されていったのですね。

**荒谷** 自衛隊で感じていたのは、見どころのある真面目な兵ほど、「これじゃあ国は守れない！」と憤慨して辞めていく。彼らが命を惜しまず任務に邁進できる場所をつくらなくてはと、かねがね思っていましたので、忠誠の宣誓を上か群戦士の武士道」を隊員に示しの格好をしても、やはり武士にはいるのです。生死の選択を迫られ

いましたので、忠誠の宣誓を上から強要される西洋騎士団のような奴隷的軍隊ではなく、日本国体に自発的に忠誠を尽くし、猛々しい神武の精神を継承する「もののふの集団」を創ろうと思いました。

それを自らの天命と信じていると、不思議なことに、そのために必要な情報や人が集まってきます。五年後には、そういう仕事ができる補職も与えられました。結局、計画段階から主務係長として関わり、事業化、部隊創設準備そして指揮官へと思いが叶ったのです。

――特殊部隊とはどのような任務を負う部隊なのでしょうか。

**荒谷** 冷戦終了後は国と国の大規模な戦争よりも、新たな世界秩序の構築に向けた活動が軍隊の主任務となりました。平和構築活動や人道復興支援活動、そして対テロ作戦などです。特殊部隊というのは、そうした活動の中で、軍事的機能だけではまかないきれない複雑な作戦を遂行する特別な部隊です。

――それで平成十六年に特殊作戦群の初代群長に就任されたのですね。

**荒谷** 創設の際、私は「特殊作戦群戦士の武士道」を隊員に示しました。

一、確たる精神的規範を有し、生死の別を問わず事に当たる肚決めをすること

一、臆せず行動できる勇気とこれを維持する気力を鍛錬すること

一、事を成し遂げる実力（知力、技術、体力）を修養すること

一、言動を一致させ信義を貫くこと

隊員は、私が訓練を終えた米陸軍特殊部隊の「グリーンベレー」に準じた厳しい選抜試験と、長期の課程教育が義務付けられ、結果、特殊作戦群の隊員になれるのは全国の優秀な志願者全体の半数以下です。

## 一瞬のために命を賭けた稽古をする

――特殊作戦群というのは本当に選ばれし精鋭部隊なのですね。

**荒谷** はい。いまでも私のところに来る自衛官に言うことですが、戦闘服を脱ぎ、鉄砲を措いたら一般市民と変わらなくなってしまうというのは、日本の武人として情けない。おそらく刀を措き、町人の格好をしても、やはり武士には武士たる何かがあったと思うよと。

実際、幕末に諸外国の人は日本の武士の人格に感銘を受けたわけで、おそらく人間の鍛錬、素養というものにおいて、一般の市民と違う倫理道徳集団を育成していたと思います。

そして、その武士たちの精神を培っていた根底に、今回いただいたテーマである「歩歩是道場」があると思います。これは逆の言い方をすれば「常在戦場」ということになると思いますが、戦場では、感性をフルに働かせて実戦をしながら常に学習をしなくては生き残れない。実生活と学習の間の境目は殆どないと思うのです。

だから、道場では、なるたけ実践に近く、実践は稽古のような落ち着いた心境でと。

剣術の稽古でも、真剣での稽古は欠かせません。真剣を使わないとできない精神の鍛練があります。

――ああ、木剣ではなく本物の真剣で稽古を。

**荒谷** はい。なんのために稽古をしているかというと、最終的には生き死にの問題を前提に、その時真心を貫徹できるように鍛練しているのです。生死の選択を迫られるような場面に遭遇した時、しかも自らの信義を曲げてしまえば生は得られるという時に、自分は真心、信念を貫徹できるか。

道場の入り口に緒方竹虎が葦津先生に揮毫した「生還を期せず」の書が掲げられていますが、真剣で対峙している時、相手の懐に飛び込んでいくのは怖いですよ。しかし、相手が最も嫌がることでもある。入り身、捨て身といいますが、飛び込んでいったら二度と戻れないかもしれない。それを分かった上で、踏み込めるかどうか。そこを武道の稽古で鍛練しているのです。

――いざという時の覚悟を鍛練するために稽古をしていると。

**荒谷** 真剣での稽古で自分が傷を負うのは構いませんが、相手に怪我させたり傷つけたりする恐れもあります。だからといって手を抜けば、かえって危ないし、肝心の心の鍛練ができない。

自衛官でも「何かあったら自分は国を守ります」という人がいますが、本当にできるのかと。演習ではなく、本当に敵の弾が飛び交う戦場にあって、敵の弾に向かっ

「常在戦場、至誠館では真剣の稽古は欠かせません」

て踏み込む精神を鍛練しなくては、全く使い物になりません。

もちろんその場になってみなければ分からないことです。どんなに真剣の稽古を重ねても、「その場」ではできないかもしれない。しかし、私たちの先人は「その場」という一瞬のために、心身を磨いていたのです。だからこそ、日本人は、戦において凄まじい戦闘力を発揮できたと思います。

## 「成る」

――荒谷館長が武道を通じて目指される境地とはどんなものでしょうか。

**荒谷** ……境地というのは、私には分からないですね。

そもそも武道にここでいいという到達点があると思えないんですよ。生きている間に、「ここまでこれた」ということはあっても「極めた」という領域は、むしろあってはいけないような気がします。

それよりも最後まで思いを貫徹することのほうが重要だと思います。よく定年後に「第二の人生」といって生き方の方向性を変える方がいるとお聞きします。それはそれぞれの生き方ですが、私は最後まで一つで貫き通せたかどうかが重要じゃないかなと。

いや、むしろ楠木正成の「七生報国」のように、何度生まれ変わっても変わらないというくらい、自分の精神は不変であると言い切れる人生でありたいと思っています。

――生きている限り武の道は限りなし、ということですね。

**荒谷** これまで様々な教えをいただいた中で、「成る」ということを常々反芻しています。

これは戦前の神道界に大きな影響を与えた今泉定助先生のご著書にあったのですが、簡単に言うと「日本人として生まれた以上、日本人に成るということに努める。そして日本人に成り切る。それだけだ」と。

若い頃に読んだ時は素通りしてしまっていましたが、様々な経験を経て、いま読み返し、「ああ、なるほど、そうだな」と思うのです。

――どういうことでしょうか。

**荒谷** 私の経験を通じて言うと、感服するような人を知った時、「凄いな」で終わらせず、自分もその尊敬する人に「成る」、ということ。

そこから出発して、「西郷隆盛は凄い」「山岡鉄舟は人物だ」と思ったら、「よし、自分も山岡鉄舟に成ろう」と発心して、真剣に努力すること。もちろん百分の一程度の歩留まりかもしれませんが、崇敬する人物に少しでも近づこうと歩みを進めていくこと。それが大事だということです。

そして今泉先生は神道の先生ですから、「最後は神と一体に成る」と。

――神に？

**荒谷** 例えば、赤坂に乃木神社がありますが、このお社は、慰霊や顕彰のためというよりは、後世の人々が参拝することで「自分も乃木さんのように成ろう」とその精神を継承しようと祈願することに意義があるのだと思います。

靖國神社はまさにそうですよね。いまを生きる国民が「自分もまた靖國の英霊の精神を継承し、護国のために役立つ人間に成ります」とお誓い申し上げるほうが、「後に続くを信ず」と国のため身を散らした御祭神はお喜びになると思います。

――それは武道にかかわらず、どんな立場の人にも言えることですね。

**荒谷** そう思います。自らの道で尊敬する人に出会ったら、「へえ、凄いな」で終わらせず、「自分もそう成る」と信じて真剣に一歩ずつ歩みを進めていく。そこから得られる学びもまた「歩歩是道場」の精神に繋がるのかもしれません。

ここ明治神宮は、御祭神が明治天皇ですから、明治天皇の大御心に添い奉る人物になる、と祈るわけです。それだけでも一生かかってもなし得ないほどの大目標になります。三代目至誠館館長という立場をとおして、明治天皇の御心の一端でも叶えることができましたら本望と思っております。